

# 大 学 史 研 究 通 信

第 110 号 2024 年 7 月 3 日 (水)

大学史研究会

第 110 号の内容：会員情報・新入会員 自己紹介、大学史研究会 書評会（5 月）開催報告、2024 年度第 47 回大学史研究セミナーについて、『大学史研究』編集委員会からのお知らせ、推薦委員会の構成の報告について、次期運営委員立候補の募集、2024 年度会費納入のお願い、書評、会員新刊ニュース、編集後記、大学史研究会運営委員・事務局員一覧

## 会員情報

### 新入会員（順不同）

大津 正知 会員

（所属：茨城大学教学イノベーション機構）

菅原 亮芳 会員

（所属：高崎商科大学商学部）

中野 知也 会員

（所属：東京大学大学院教育学研究科 修士課程、東京大学 事務職員）

## 新入会員 自己紹介

### 大津 正知 会員

この度、本研究会に入会しました茨城大学教学イノベーション機構の大津正知と申します。これまでの職務としては、大学の教育改革、FD/SD、大学評価等に従事してきましたが、大学院の専攻が科学史であったこともあり、今日の大学改革と繋がりのある高等教育政策や大学の制度の歴史に関心をもってきました。会員の皆様から多くを学ばせていただけたら幸いです。ご指導のほど、よろしくお願いいたします。

### 菅原 亮芳 会員

2024 年 3 月に 70 歳で定年退職。2024 年 4 月から高崎商科大学商学部教授（特別任用教育職員）を拝命している菅原亮芳（すがわらあきよし）と申します。任命内容は教職課程担当と学園 120 年史の編纂、つまり大学沿革史、学校法人沿革史の編纂および刊行です。小生はこれまで近代日本の青年の「学び」の構造史、苦学・独学史、近代日本の教育メディア（教育情報）史研究などを進めてきました。これまでの研究をプラットフォームとして、①各種学校として出発した学校が学問専門機関である大学まで発展する歴史を、②学ぶ者の側から叙述することの可能性と限界について学びたいと思い入会しました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

### 中野 知也 会員

この度入会いたしました中野知也と申します。東京大学に事務職員として勤めており、この 4 月からは東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策コース修士課程に在籍しております。研究としては、政策史や大学教授職研究の蓄積も踏まえた上で、日本における教員任期制の歴史的展開を明らかにしたいと考えております。会員の皆様との交流を通じて、自身の研究を深めてゆく所存です。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

（会員情報担当：船勢肇）

## 大学史研究会 書評会（5月）開催報告

昨秋から今春にかけて会員の博士論文が2冊続けて出版されたことから、書評会を企画・実施しました。今回は“若手応援企画”として、将来博士論文を執筆し単行本として刊行したいと思っている大学院生あるいは若手研究者に有益な情報を提供するという趣旨のもとに開催いたしました。

第1回書評会（金明姫『韓国高等教育改革下の大学開放政策の展開：韓国名誉学生制度による大学の知の変容』東信堂、2023年）は、5月19日（日）16:00～17:30に、青山学院大学（青山キャンパス）にてハイブリッド形式で行いました。コメンテーターには国立教育政策研究所の田中光晴氏をお招きしました。当日は、はじめに執筆者の金会員から著書について章毎の紹介があり、続いて田中氏から、本書の意義として、①韓国における大学開放政策の展開過程を丁寧に跡付け、日本では注目されてこなかった名誉学生制度について現地の事例調査に基づき、その意義を明らかにしたこと、②高等教育政策と生涯学習政策のいわば交差点として位置付く高齢者の学びに着目しながら、果敢にも大学の在り方を再検討しようとしたこと、の2点が挙げられました。そして、今後の課題として、①大学の「知」は「変容」したのか、②大学開放を議論するのであれば、高齢者以外にも視野を広げる必要があるのではないか、③大学開放の実現・持続可能性、④名誉学制制度をどのように展望するか、という指摘がありました。

その後は参加者を交えて活発な議論が行われました。参加者は11名（対面8名＋オンライン3名）と少なめでしたが、90分があつという間に感じられるほどの密度の濃い時間となりました。博士論文の書籍化という点について、本人が諦めないことは当然のことにせよ、指導教員も諦めない心を持つという話には、いろいろと感じるところがありました。書評会のあとには、近くの和食屋で懇親会を開催しました。

なお、第2回書評会（菅原慶子『「象牙の塔」と「生ける社会」の結びめ：明治期東大・早稲田の学術普及からみた大学理念』東京大学出版会、2024年）につきましては、次号通信にてご報告いたします。

（セミナー担当：山本珠美）

『韓国高等教育改革下の大学開放政策の展開—韓国名誉学生制度による大学の知の変容—』（東信堂、2023年）を読む

金明姫（創価大学通信教育部非常勤講師）

2024年5月19日（日）、16時より、青山学院大学青山キャンパス（対面とオンラインのハイブリッド開催）にて2024年度第1回書評会が開催された。拙著『韓国高等教育改革下の大学開放政策の展開—韓国名誉学生制度による大学の知の変容—』は、筆者が2018年に創価大学大学院文学研究科に提出した博士学位請求論文「韓国における高等教育改革下の大学開放—『名誉学生制度』と大学の『知』の変容」（2018年3月学位取得）を改題し、加筆・修正を行い刊行したものである。当日の書評会では、まず、筆者より本書の概要と出版に至るまでの経緯を説明し、田中光晴氏（文部科学省総合教育政策局・専門職）による当日のコメントに回答する形式で行われた。ここでは、田中氏よりいただいたコメントに対する回答を中心に報告させていただきたい。

1点目は、大学開放プログラムである「名誉学生制度」によって、大学の『知の変容』は達成できたのか、また、本書では大学の「知」、または大学の「知の環境」についてどのように定義しているかというコメントをいただいた。この課題については筆者自身も刊行まで最も悩んだ難題であるが、本書では、「知の変容」の一事例として、「名誉大学院制度」を取り上げた。この制度は、大学開放で新たに招き入れた高齢者の新たな学習ニーズを反映して、大学側が新しく創設したカリキュラムである。また、若い在学生と同様にクラブ活動を許容している点も、若い学生と高齢者の互いの経験と知識を共有できる世代間を統合した学習共同

体の可能性を開く「知の変容」として考えた。

2点目は、大学開放を議論するのであれば、高齢者以外にも視野を広げる必要があるのではないかというコメントが寄せられた。本書で取り上げる「名誉学生制度」は、創設当時、韓国で高等教育の機会が最も乏しい高齢者を優先的に考え、学歴や正規の学校教育の経験を問わず、満55歳以上の高齢者の誰もが大学教育に参加できるようにした。高等教育におけるダイバーシティ(diversity)実現という観点からみると、コメントで取り上げている大学平生教育院における「知的障害者のための非正規特別課程」など、障がい者、女性、外国人に加え、高齢者をも視野に入れた大学開放の推進は今後の大学開放の必然的な課題であると考ええる。

3点目は、大学開放の実現・持続可能性についてである。コメントで指摘している通り、大学開放は、その運営において、専担部署の設置や学内運營業務による教員の多忙化など、大学側に過度な負担になっていることが現状である。ただし、今日の韓国の高等教育の現状を参照すると、大学開放は、大学が単に地域社会のために果たす大学奉仕機能から、大学の全学的な視点から生涯学習を実現する方向へと大学システムの転換（「成人親和型の大学平生教育体制」、「高等平生学習複合体制」など）をも要求されており、大学の発展戦略として大学開放が推進されている。大学が立地する地域社会の課題に積極的に関与し、地域社会の「知の拠点」として果たす大学開放の役割は、高等教育の発展において必然的な課題であり、その持続可能性を探ることが高等教育の重点課題になると考える。

最後に、名誉学生制度の展望についてである。筆者が「名誉学生制度」の事例研究で最も注目している点は、高等教育において高齢者をどのように位置づけているかである。韓国の高等教育においては、高齢者は大学が地域社会への社会貢献の観点から一部の講座を開放する公開講座や、大学の収益創出に関わる生涯学習プログラムなどに参加する大学教育の顧客もしくはサービスの受患者の存在となっていた。これに対して、「名誉学生制度」は、若い学生と同じく学ぶ意欲を持つ、学習の可能性を持つ存在として見直し、高齢者が一個人として自身の知識や経験、価値をもちより、若い在学生とともに共有し合う存在であることを前提し、正統な大学構成員として位置づけている点である。

今日の高等教育を取り巻く環境は、大学の存続に関わる入学資源の確保と、多様な教育経験と教育ニーズをもつ「すべての学習者」が学びうる「開かれた大学の『知』の環境」の創出という2つの課題をどのように解決していくかが、大学の重要な課題になると考える。最後に、大学史研究会において、拙著の書評会を開催していただき、心より感謝申し上げます。山本珠美氏をはじめ、コメンテーターの田中光晴氏、会場とオンラインで参加して下さったすべての方々に心より御礼申し上げます。当日いただいた研究上の貴重なご意見とご指摘を踏まえて、今後の研究にさらに精進してまいります。大変ありがとうございました。

#### **2024年度第47回大学史研究セミナーについて**

本年度の大学史研究セミナーは、11～12月頃、対面にて行います。会場校については現在交渉中です。昨年度は久しぶりの対面開催となり、活発な議論が交わされました。今年度も多くの方に参加いただきたく、現在準備中です。詳細につきましては研究会ホームページをご確認ください。

(セミナー担当：山本珠美)

#### **『大学史研究』編集委員会からのお知らせ**

紀要「大学史研究」第33号は、2024年12月に刊行予定です。6月末日で投稿を締め切り、現在、編集作業を進めております。

第33号では「特集」も設けます。ここでは昨年度の研究セミナーシンポジウム「神田『学生街』と大学史」での発表内容を軸に構成し、神田が学生街として発展してきた経緯と、大学との関わりについて多角的に掘り下げていきます。その他にも「目玉企画」を検討中です。

紀要刊行に向けて編集委員会一同、鋭意努力しております。諸事ご理解・ご協力のほど、何卒よろしくお願いたします。

(紀要編集委員長：大川一毅)

### 推薦委員会の構成のご報告について

会員みなさまには、本年冬に開催予定の第47回大学史研究セミナーにおいて、現在の運営委員7名の改選について審議をしていただきます。その審議に先立ちまして、2023年度総会においてみなさまに審議・承認いただきましたように、次期運営委員候補者を選定する推薦委員会を立ち上げることになりました。自薦他薦をもって候補者の選定を行い、以下の運営委員・会員で委員会を構成することとなりましたのでご報告申し上げます。

運営委員より（五十音順）

- ・大川一毅会員（岩手大学）
- ・坂本辰朗会員（創価大学）
- ・山本珠美会員（青山学院大学）

会員より（五十音順）

- ・蝶慎一会員（香川大学）
- ・深野政之会員（大阪公立大学）
- ・福石賢一会員（高知工科大学）
- ・渡辺かよ子会員（愛知淑徳大学）

(事務局長：山本尚史)

### 次期運営委員立候補の募集

次期運営委員を選出するための推薦委員7名を選出しました。今後、総会開催までに推薦委員会を開催し、推薦候補の選定を進めて参ります。それとは別に2021年度総会で承認されました「大学史研究会運営委員会の構成、選出方法に関する内規」に基づき、自薦他薦によっても候補者を募集いたします。

1. 立候補受付開始（この通信の発行日）
2. 立候補受付終了：2024年8月23日（金）
3. 立候補及び推薦名簿を会員に発送（11月中旬：セミナー号外に同封）
4. 総会にて投票

立候補される方は、8月23日（金）までに事務局メールアドレスにご連絡ください。立候補届の様式は定めませんので、メール本文にて立候補の意思をお示しください。

(事務局長：山本尚史)

### 2024年度会費納入のお願い

今年度の年会費納入についてお願いのご連絡を申し上げます。大学史研究会の実収入は、会員各位からの年会費に大きくよっております。会員の皆様の円滑な研究会運営へのご協力に感謝を申し上げます。年会費は5,000円です。なお、大学院等在学あるいは日本学術振興会特別研究員の各位には、「院生・学生会費」として3,000円が適用されております。

年会費を3ヶ年度分以上滞納されている会員には、研究会の継続参加のご意志を年会費納入によって確認できるまでは、大学史研究会からの諸連絡、「研究通信」、「大学史研究」（紀要）等の発送の停止が決定しております。該当する会員へのご連絡はメール等を用いておりますのでご留意願います。当該連絡と入れ違いに年会費を納入いただきました場合には、何卒

ご容赦のほどお願い申し上げます。

なお、今年度より大学史研究通信の電子化に伴い、振込用紙の送付を取りやめております。  
ご不便をおかけしますが、銀行等の備え付けの振込用紙か、インターネットバンキングを用いた振り込みをお願い致します。引き続き、大学史研究会の発展と円滑な運営のため、会員各位のご理解ご協力をお願い申し上げます。

—— 年会費納入払込先 ——	
郵便振替口座	： 大学史研究会      口座番号 00120-3-47583
または	
銀行口座	： 大学史研究会      三井住友銀行 池袋東口支店（店番 671） 普通預金（口座番号 3456109）

（会計担当：山崎慎一）

## 書評

寺崎昌男『大学沿革史編纂の手引き』（野間教育研究所、2024年3月）を読む  
広島大学・東北大学名誉教授 羽田貴史

1. 寺崎昌男氏が、また一つ貴重な成果を学界に提供した。わずか55頁の小冊子に、大学沿革史の目的・役割・意義、編纂活動の手順（組織、資料、記述）、論点、運営上の課題、刊行後の課題を包括的に記述して全体像を提示した。このテーマでの最初の道標は、氏による「日本における大学史研究の動向と課題—大学沿革史編纂を中心として—」『東洋大学史紀要』第4号（1986年）である。38年後の本冊子は、タイトルが示すように、大学史研究の副次的領域であった大学沿革史編纂が、資料収集・保存、企画・編纂、出版を一連の体系として持つ独自の領域に発展して来たことを示す。

例えば、前著で提言として述べられた文書館の必要性、事務局の協力体制は、本書では当然のことであり、その実践的なあり方が定式化されている。2つの著作を並べて読むだけで、大学史編纂の歴史が素描できる。

2. 冊子は、わかりやすい表現で深い思想を、研究者・職員の区別なく理解できるように書かれている。「はじめに」が、「教育・研究の内部質保証」と「大学改革」という機関全体の課題に結び付けて編纂を意味づけていることは、とても重要である。大学史研究の一部として編纂を扱い、しばしばみられる大学史研究者の編纂へのマインド—史資料への執着と細部への過剰なこだわりを乗り越えて、外へ向かう視点が貫かれている。

「第1章 編纂・刊行の事業をどう始めるか」に始まる章立ては、年史編纂の企画・立案、決定、作業開始という一連の手順に沿って、当事者が何をすべきかがわかりやすい。「第2章 編纂活動 ステップ1 基本資料を検索する」は、資料の検索・収集として視野に収めるべき資料群を、「第3章 編纂活動 ステップ2 記述の骨格」は、目次や時期区分など沿革史の全体構造を描いている。

「第4章 対話の章 編纂方針・調査・執筆をめぐる」は、「大学紛争」など論争になりやすい事項4つをとりあげ、背景説明と選択肢を提示している。選択肢をその背景も含めて提示し、関係者の対話を通じて解を見出すことの示唆は、本冊子全体の特徴であり、時期区分（pp. 32-34）、事件の扱い（pp. 37-43）、選択の系という視点に表れている。人文・社会科学系の研究者は、決定論的思考にとらわれることが多く、論争的なテーマは、デッド・ロックに乗り上げるか、対立を避けて無難な結論になることが多い。「第5章 編纂として並行して起きるさまざまなこと」は、編纂事業と組織の運営への手引きである。沿革史編纂は大学運営の経験の乏しい教職員が担うことが多く、主体的に進む道を切り開けないこともある。

大学で意思決定にかかわるシニア層への説得材料としても有益であるし、大学沿革史編纂の全体地図から自らのポジションを決めることの示唆は（第3、4章）、大学執行部も含めた方向性の決定に重要であり、そのことは、大学運営の中核人材が、自分たちの大学を再認識する機会ともなることが示唆されている。「第6章 刊行へ」は、執筆だけが編纂でなく、組織運営を含むものであり、特定の解を示さず、関係者の対話によって解を見出すことが奨励されている。実務と経験に裏打ちされた氏だからこそ書けることである。

3. 前著と異なるスタンスもある。かつては、通史の編纂・刊行に加え、資料編と紀要の刊行も沿革史編纂事業に大きな役割を果たすとしていた氏であるが、冊子では、紀要発刊に「手間を取られて本業遂行のエネルギーが削がれてしまったという例もないではありません。両者が相即して進むことを通じて、日本の近代現代研究のレベルが高まることを期待したいものです」（p.44）と述べ、柔らかな表現ながら、安直な紀要刊行に警鐘を鳴らしている。評者の観察では、沿革史編纂を支える文書館が公文書館として制度化され、移管された行政文書の保存・管理業務が肥大したことによって、機能の重点が変化した影響が強いと思う。これが過渡的なものかどうかは要観察だが、紀要が学問的プレゼンスの低い業績稼ぎの場にならないように、当事者は真摯に受け止めるべきだろう。

第2章で、短いながら示される史資料のガイドは、基本文献のマップでもある。高崎商科大学図書館の受験雑誌類の存在は、文化的にも貴重であり、恥ずかしながら、本冊子で知った。

4. もちろん、この冊子だけですべてが完結するものでもない。『手引き』を幹として枝葉を豊かにすることは、次の世代—特に大学史編纂に関係している人々の責任でもある。大学沿革史編纂と大学史研究とのリンクは、大学史研究会でも深い関心を持つべき課題である。

例えば、すでに大学沿革史が刊行されている場合、その後の出版は、前の出版以後の時期を重点とすることがある。言い換えれば、その後の研究（大学史とは限らない）の発展が反映しない沿革史になってしまう。占領期の新制大学発足時の記述には、GHQ文書を使いこなすことが必須だが、大学沿革史編纂の片手間で個別大学の関係資料を掘り起こすのは難しい。立命館大学 GHQ/SCAP Data Base Server (<https://ghq.ritsumei.ac.jp/>) は、CIE Conference Report を検索でき、個別大学名を入れると関連するレポートがわかる。これを収集するだけで、GHQ と当該大学との折衝関係がわかる。Rikkyo University で検索すると、Subject: Communist Developments at Rikkyo University, Reporter: Eells, Name: Nakagawa, Position: Professor, CIE(c)3672, Date: Jan 24 1950, Place:CIE605 など6件（重複）がヒットする。このことだけでも、沿革史は深まる。

5. 35頁以下で述べられている資料編も重要である。大学史研究の基礎資料を提供するという大学沿革史編纂の役割を、われわれはもっと共有すべきである。「国立大学長の選考制度に関する研究—選挙制度の定着と学長像—」『日本教育行政学会年報』No.36（2010年）を書いた時には、東京学芸大学史に重要な文部省の資料があった。戦後は、統合・移転が相次ぎ、基礎資料すら当該大学に保存されていないことがある。資料の共有のためにも、目録化と公開は必須である。

氏が指摘する「学内法を重視した資料編」（p.35）は、重要である。国レベルの制度改革に当該大学がどう対応したか—各大学がどう対応したかを把握する貴重な資料になる。しかし、ネットで「〇〇大学規則集」をググれば、現行規則は掴めるが、古い規則は見つけられない。文書館の出番である。

沿革史は、どうしても組織の歴史、講座—学科—部局の歴史になり、その集積として大学史が書かれる。これは必要ではあるが、沿革史の十分条件ではない。組織とは2人以上の人間で構成され、特定の目的を達成するものだから、大学沿革史は、機関の意思決定や政策だけではなく、構成要素としての教職員・学生に関する歴史でもあり、関連する史資料をどう集め、大学沿革史に盛り込んでいくのかが、大きな課題である。沿革史ではないが、A. M. Cohen & C. B. Kisher (2009) *The Shaping of American Higher Education* (Jossey-Bass) は、構成員の歴史を組み合わせると面白い（今年、第3版が出た）。

例えば、任期付き教員の増加は大学の基礎を揺るがし、同様に職員の雇用形態の変化も大きい。任期付き教員の数は、2017年度の『科学技術研究調査』（総務省統計局）から項目になったが、各大学の要覧類は、不揃いで比較が難しい。教員の数、種類、職階、出自、年齢などの基礎データの項目をそろえて利用できれば、比較を通じて大学の立ち位置を知る重要な知見となる。

本冊子は、大学史研究と沿革史についてのイメージを膨らませ、対話の素材となる貴重なものであり、大学史研究会でも様々な使い方をされるのが楽しみである。

追記：評者は、なぜか書評の機会に恵まれている。40本目にこの冊子を書評出来たのは、まことに嬉しい限りである。大学史研究会に感謝するとともに、50本目の書評に寺崎先生の著作をとりあげたいものである。

### 会員新刊ニュース

会員の皆様が執筆された新刊等をご紹介します。なお、会員の皆様で刊行された書籍の情報を、以下の記載欄にご紹介を希望される場合は、事務局のメール（jimu-kyoku[ @ ]daigakushi.jp）宛にその旨をお知らせいただければ幸いです。お待ちしております。

- ・別府昭郎『大学を問う ―初期大学史研究会のあゆみ』学文社、2024年4月。
- ・吉村日出東『慶應大学生と学ぶ社会科教育 ―コロナ禍におけるオンライン授業の風景』毎日新聞出版、2023年12月。

（事務局・通信担当：蝶慎一）

## 編集後記

梅雨の時期ですが、全国各地で真夏日や大雨などのニュースが報じられております。このたび「大学史研究通信」第110号が完成致しました。本号は、書評会（5月）開催報告、今年度の大学史研究セミナー、書評など盛りだくさんの内容を掲載しております。会員の皆様に充実した内容をお届けできますことを心より嬉しく思います。

昨今、DXの取り組みが急速に進められています。この「大学史研究通信」も印刷版（紙）ではなく、PDFファイルでお送りしております。日頃からパソコンやタブレット端末、スマートフォンを持ち歩かれている会員の皆様も多いかと存じます。ちょっとした空き時間や待ち時間などに本号も繰り返しご覧いただけますと幸いです。引き続き、事務局では大学史研究会が多様なコネクションとネットワークの空間になりますように活動を進めて参ります。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

（事務局・通信担当：蝶慎一）

「大学史研究通信」第110号の編集は、事務局・蝶 慎一（香川大学）が担当致しました。  
連絡先：jimu-kyoku[ @ ]daigakushi. jp

「大学史研究通信」第111号は、2024年9月下旬発行予定です。

### 大学史研究会

#### 〈運営委員会代表〉

坂本辰朗

#### 〈事務局連絡先〉

事務局へのお問い合わせは、下記代表Eメールアドレスまでお願い致します

E-mail: jimu-kyoku[ a ]daigakushi. jp

#### 運営委員（五十音順）

大川一毅（岩手大学）	坂本辰朗（創価大学）
船勢 肇（長崎女子短期大学）	山崎慎一（桜美林大学）
山本珠美（青山学院大学）	山本尚史（筑紫女学園大学）
吉野剛弘（埼玉学園大学）	

#### 事務局員（五十音順）

蝶 慎一（香川大学）	原 圭寛（昭和音楽大学）
------------	--------------